# 武蔵野日曜集会　降誕節

# 受肉

## ――ヨハネ伝第１章１～18節――

１９８３年12月25日
小池辰雄

子なる神　成りたる物　すべての人は宗教人　どん底の生れ方　どん底は無者　天地融合　関わりを持つため　あるごとくあれ　義と愛の叫び　一たび贖いたまえり　めぐみとまこと　空っぽの私の中へキリストが

**【ヨハネ１・１～18】**

**1太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。2この言は太初に神とともにあり、3万の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。4之に生命あり、この生命は人の光なりき。5光は暗黒に照る、而して暗黒は之を悟らざりき。6神より遣された人いでたり、その名をヨハネという。7この人は証のために来れり、光に就きて証をなし、また凡ての人の彼によりて信ぜん為なり。8彼は光にあらず、光に就きて証せん為に来れるなり。**

**9もろもろの人をてらす真の光ありて、世にきたれり。10彼は世にあり、世は彼に由りて成りたるに、世は彼を知らざりき。11かれは己の国にきたりしに、己の民は之を受けざりき。12されど之を受けし者、即ちその名を信ぜし者には、神の子となる権をあたえ給えり。13斯る人は血脈によらず、肉の欲によらず、人の欲によらず、ただ神によりて生まれしなり。14言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり、我らその栄光を見たり、実に父の独子の栄光にして恩恵と真理とにて満てり。15ヨハネ彼につきて証をなし、呼ばわりて言う『「わが後にきたる者は我に勝れり、我より前にありし故なり」と、我がかつていえるは此の人なり』16我らは皆その充ち満ちたる中より受けて、恩恵に恩恵を加えらる。17律法はモーセによりて与えられ、恩恵と真理とはイエス・キリストによりて来れるなり。18未だ神を見し者なし、ただ父の懐裡にいます独子の神のみ之を顕し給えり。**

●子なる神

ヨハネ伝１章１節、

**1太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。**

これはご承知のとおり、「言」は「ロゴス」という言葉ですが。ヨハネ福音書の記者は、それが使徒ヨハネであるかどうかなんてことは今日は言いません。私は使徒ヨハネと思ってますけれども。

これは創世記第1章1節の、

**「元始に神天地を創造たまえり」（創世記1・1）**

と相応ずるようなもので、

**「太初に言あり」**

という。日本語で「言」と訳すが、昔は「道」と書いてあった。この「道」も動詞では「いう」とも読めますから。しかしむしろ、「道」というのは非常にいい訳だと思う。道、言。

「言は在った、実在していた」

と。だから、道と言おうが、言と言おうが、これは観念ではない。隠れたペルゾナ、隠れた人格的――まぁ人格と言うしか仕方がない――むしろ、神格的存在です。それを神学的には「ロゴス・クリストス」なんていう言い方をしますけれども。

**言は神と偕にあり**

これが神と偕に、キリストが父と仰っているその父と偕に在った。あるいは、「プロ」という字は「神に対して」とも訳せるんですが。そして、この言は神であった。神性を持っていた。言そのものが神である。第二の神であるわけです。ですから、父なる神と、その他に「言」という神さまがあった。神格的存在があった。

ヨハネ伝8章54節から見てみます。

「54**イエス答えたもう『我もし己に栄光を帰せば、我が栄光は空し。我に栄光を帰する者は我が父なり、**

キリストは栄光を自分では何も自分に帰しようと思っていない。無者ですから。

**即ち汝らが己の神と称うる者なり。**55**然るに汝らは彼を知らず、我は彼を知る。**

私は神さまを知っているぞと。お前たちは分かってないじゃないかと。

**もし彼を知らずと言わば、汝らの如く偽者たるべし。然れど我は彼を知り、且その御言を守る。**

父の御言を守る。「守る」はむしろ、「従う」と言ってもいい。身をもって体現していた。

56**汝らの父アブラハムは、我が日を見んとて楽しみ且これを見て喜べり』**

不思議なことが書いてあるでしょ。

57**ユダヤ人いう『なんじ未だ五十歳にもならぬにアブラハムを見しか』**58**イエス言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、アブラハムの生れいでぬ前より我は在るなり』**

そういうことを言うものですから、

59**爰に彼ら石をとりてイエスに擲たんと為たるに、イエス隠れて宮を出で給えり。」（ヨハネ8・54～59）**

瀆しごとだと言うわけです。「アブラハムよりも前に在った」というのは、もう永遠の前から父と偕に、「言」として――ロゴスと言おうが何と言おうがいいですよ――第二の神格として父と偕に在った。キリストはすぐ「父」と仰るから、彼は自分を「子」として自覚していらっしゃるわけです。子なる神だね。三位一体という、その自分が真ん中です。あとは聖霊の問題になる。

## ●成りたる物

2**この言は太初に神とともにあり、**

「言」「ロゴス」という霊的な実在として神と偕に天界にいた。神さまは万物を造られました。人間を最後に造られた。創造者です。ですから、創造以前にキリストは居られたわけです。だから今度は、「万の物をキリストは造った」とそのあとに書いてある。

3**万の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。**

万象はこの言によって成った。言なる実在者によって成ったと。

**「神光あれと言いたまいければ光ありき」（創世記1・3）**

という。神さまの言と、言としての実在とがもう重なりあっているような事態です。神の言なるものの行為はすぐに成る。そういう行為がすぐに成るのは、ちょうど日本語と同じで、「言が成る」と書いて、これが「誠」なんです。誠というのは、ただ観念的に「それは本当だ」なんていうことではない。実現しなければ、誠とは言えない。だから、ゲーテが

「始めに行為あり」

なんてことを言い出した。「始めに言あり」ではどうも物足りない。「始めに思い」（ズィン）があった」、「力（クラフト）があった」、そして最後に、「行為（タート）があった」と、彼は『ファウスト』の中で書いている。神さまは、言と行が一つなんです。口に発しては言であるが、手足の動きに発しては行為となる。だから、言も行も、実は同じことが二つの現われ方をしているだけの話です。ちっともバラバラではない。全く一つ。

「言うは易く、行うは難し」

なんていうのは人間の言うことで、神さまの世界はそうじゃない。

**「わが言は霊なり、生命なり」**

と、キリストは言を発すれば直ちに跛者が立ったり、死人まで甦ったではないですか。

**「ラザロよ、起きよ！」**

と言ったら、もうそろそろ腐りかかっていた肉体が甦って起きてきたでしょ。これが言は直ちに行であるわけです。力を持っているから。

それで、神さまは見えないですよ、我々には。解らないです。しかし、神さまはモーセに現われた時にも、「降って行く」と言う。イスラエルの民を助けてやるために、私は降りて行くと。出エジプト記3章です。神さまはモーセに、

**「彼らの悩みを知っているから、私はおりて行って助けてやろう。お前はその使いになれ」**

**「そんなことはとてもできません」**

**「私がお前と一緒にいるから、行け」**

**「それでは、行きます」**

と言って、モーセは始まった。これが出エジプトです。

## ●すべての人は宗教人

私はしょっちゅう言っているでしょ、

「万人は魂がある。魂があるということはすべての人は宗教人であるということだ」

と。そのことに本当に気がついていないものね。教育者がそのことに本当に気がついていないから、日本の教育はいつまでたっても始まらない。小さい人たちの魂を愛することをするためには、その魂の根源の世界に先生がいなかったらできないんです。「倫理、倫理」なんて言って騒いだって、あんな小乗的な騒ぎ方で何になるか。むしろ、あれは半分偽善者の声だ。「倫理」なんて言わないで、本当は「宗教」と言った方がいいんだ。それが誰も言えないんです。

神さまのすることはすべて具体的なんだ。理屈を言っているのではない。キリストの

**「我は道なり、真理なり」**

という、あの「まこと」という字を「真理」と訳すね。この「真理」という言葉は非常に躓きになる。我々が使っている「真理」という言葉はどうも観念的なんだ。

真・善・美と言うでしょ。この「真」の世界は、自然科学的な真理が、まぁ真理、まことのことわりだ。因果関係で、原因と結果、作用と反作用がある。この真の世界を徹底的に究めたのが哲学者カントです。カントは善の世界も、美の世界も究めた。カントの三大批判は、哲学のすべてはカントに流れ込んで、またカントから出ると言われるくらい、カントというのは大変な人ですよ。ドイツには凄いのがいるね。カントだ、ベートーベンだ、ルターだ、ゲーテだなんて。この四人はドイツの四つの星だろうな。

## ●どん底の生れ方

今日は「受肉」なんていう題で、これは神学的な言葉ですけれども。それは1章14節が中心です。「インカルナツィオ」という。インカネーション。ドイツ語では「メンシュヴェルドゥング」「人と成る」、あるいは、「フライシュヴェルドゥング」「肉と成る」とも言いま

す。とにかく、具体的に我々と同じ人に成られること。

**「人の弱きを思いやることができる」**

とヘブル書の4章かどこかに書いてある。方々に出てます。私たちと同じ人となる。しかも、人と成るその成り方というのは、「馬ぶねの中に」生まれた。

さきほど歌っていただいた121番の讃美歌は傑作だね。由木康（ゆうきこう）という人はたったこの一つの讃美歌を作っただけで彼の使命を果たしたと言ってもいいくらいです。これは素晴らしい讃美歌です。霊感でこれを作ったのでしょう。私の「羔の血」も、自分で言ったらおかしいけれども、傑作ですけれども。

馬槽（まぶね）の中に生まれた。大変なことです。そんな人は他にいなかったものね。どん底の生まれ方です。「どん底」という言葉を私は使うというと、もうキリストです。イエスというひとはどん底のひとです。これより下はない。一番どん底にいる。

**「キリストは死んで黄泉（よみ）にまでくだった」**

とまで書いてある。黄泉にまで下って、サタンに囚われているやつをなお天界に上げてやろうと。いかなる人もキリストの救いからはずれる人は一人もいない。どんな悪人でも。お釈迦さんの大慈大悲という言葉もある。何といっても、キリストとお釈迦さんは世界の歴史の底流を支えているかたです。愛と言い、慈悲と言う。まぁ、全く人間は救いがたき存在だからね。人がどうのこうのではないんだよな。

## ●どん底は無者

私はこないだ書いたでしょ（「エン・クリスト」第16号、１９８３年10月秋季号）。パウロは自分のことを

「罪びとの首（かしら）」

と言いました。内村鑑三先生も、

「自分は罪びとの首（かしら）だ。自分が救われるためには万人が救われなければダメなんだ」

と言いました。パウロ、内村鑑三、私もしょうがない野郎だから、私はあの讃美歌（召団讃歌B17「すべての人に」―我は罪びとの首なり―1983.8.31作）を作った。これは合唱する歌ではないと書いた。本当にそういう気持になった人は一人で歌ってくださいと。だから、私は人に何と言われようと、何も抗弁しません。

「ああ結構でございます」

と。どんなに誤解されても、どんなに悪口を言われても、私は結構です。ただ私の中には別な声がある。本当のキリストの善意が私の中にありますから。それは賜りたる世界だから。どん底に入ると、本当に担いの力が出てくるんです、逆に。これはキリストの力です。人を本当に赦し、人を本当に愛する力が出てくる。よくね、

「人はどうも信じられない。裏切られた」

なんてなことを経験なさったり何かなさるけれども、それで人を信じないようなことになったらダメですよ。逆に支えていく。そうすると、

「参りました！」

と。人間関係なんていうものは、いろいろな波風がたつよ。そんな波風を気にしていてはダメなんだよね。もうひとつ奥の世界に入っていかないと。

もう本当にどん底となると、空っぽですから。自分はどん底だと。キリストは、このどん底は、これは無者、自分が無いひとだ。どん底なんだ。それが無者。無者となると、申し上げているとおり、無限無量者に即成っていく。量りしれないところの神さまの者になる。ヨハネ伝はとにかく素晴らしい。四福音書の中では一番その点では凄いだろうね。一番霊的な書だ。

皆さん、この福音を受けとったら、人を連れてこなければダメだよ。

「あなた、来なさいよ。一切の問題を――問題がいくらあったって結構です――それを突破していく世界が欲しかったら来なさい」

と。来年は、そういった人を一人――苦しんでいる者、悩んでいる者、求めている者を――一人が一人を必ず連れてくる。そういう気合でかかってくださいよ、来年は。一人も連れてこなかったら、ここから出してしまうから（笑）。それは半分冗談ですけれども、しかし、それだけの気合が欲しい。この福音は勿体ないです、あなた方だけで聞いていたのでは。

私は自分が空っぽだから、本当にありがたいんです。楽でしょうがない。もう人の毀誉褒貶はどうでもよくなってしまった。ただこの世界を、キリストを本当に分け与えざればいられない。だから、まだ私は使命があるから、ちょっと簡単に死ねないよ。私の自分の希望では、自分の仕事が終るまであと20年かかるから。大体、100歳になってしまう。しょうがない。その仕事が終るまでは、神さまは置いていてくださるでしょう。

## ●天地融合

キリストが馬槽の中にどん底の生れ方をなさった。それを受けとるためには、自分がやはりどん底にならなければ受けとれない。空っぽの馬槽にならなければ。飼い葉桶の中に麦なんか入っていたらダメなんだ。これは空っぽの桶。無の、空無の桶。何もない。自分があったらダメだ。キリストが入ってこない。いや、キリストは、みんなゴタゴタあってもいいよ、いろんなのが。ゴミがあったり、麦があったって。まだ麦ならいい方かもしれない。何か余計なものがあったっていいよ。キリストはみんな出してしまうから、そんなものは。キリストはここに入られるときに、余計なものはみんな出してしまう。

「余計なものが出せません。主さま、どうぞみんな空っぽにしてください」

と。それでいい。そういう馬槽になる。キリストは恩恵と真理に満ちているというのは、空っぽにしてくださる。今日は、その空っぽになって――今までどうだこうだなんて、い

いよ、そんなことはどうでも――空っぽになって、そして、キリストを受けとっていく。とにかく、どん底の人になってくださいよ。そうすると、どん底の人はグーッと上げられるんです、もの凄く。コロサイ書3章に書いてあるとおり、

「キリストの中に」（エン・クリスト）

という。地上において「エン・クリスト」である。それはもう霊的には天界にいるのと同じです。天地融合している世界です。天と地とが一つです。地にありながら天である。キリストは天にありながら今度は地にやって来た。これは何のために来たかというと、キリストは我々と本当に関わりを持つためにやってきた。関係を持つために。天界からキリストがただ見ていらっしゃってね、どうのこうのではしょうがないんだ。同じ人間となって、同じく泣いたり、笑ったり、ご飯をたべたり、躓いたり、転んだりと。ただし、キリストは躓いても転んでも罪は犯さないよ。石に躓いたかもしれないけれども。裸足だものね、イエスは歩いているとき。

## ●関わりを持つため

関わりを持つためという。どういう関わりかと言うと、ペテロに言われたように、

**「私がお前の足を洗わなかったら、お前とは関わりがなくなってしまうよ」**

と。「どうぞ、そんなことはしないでください」と言ったら、キリストはそう言った。

「私はお前たちの足を洗うために来たんだ」

と。足の裏は一番汚い。泥が付いている。それを洗うために来たと。罪の贖いのことです。自我という、我執というもの、これを全部とるためにやって来た。そういう関わりのために降ってきて、お前たちと一緒になったと。

それでは、その罪はどうやってキリストは、その罪をきれいにしてくださるのか。贖う。そこはもう降誕が十字架に通じているわけです。キリストの降誕は十字架への道。なぜ、クリスマスがうれしいのか。キリストがやっていらっしゃったのが、なぜうれしいのか。私たちを本当に贖わんがために降ってきた。贖わんがためにとは何ごとであろうか。キリストは十字架を負うということ。どん底の愛です。人を助ける。本当にお互いに人を助ける、その愛がなかったら、集会なんてものはもはや意味をなさない。

「あの集会は何だか冷たいな」

なんて思われたらおしまいだ。キリストの愛をもって人の嫌がることをやって、縁の下の力持ちとなって、その人がいると何だかまわりが暖かくなってしまうようなことになる。それが本当に証し人ということ。キリストはその愛を地上で本当に実践された。その言葉において、その行為において、天国を現じつつあった。

**「天国は近づいた。汝ら悔い改めよ」**

という。「悔い改め」は、

「転回せよ、回帰せよ、廻り帰れ」
と訳す。ただ心が悔いて改めるのではない。
「全存在が神・キリストの中へ帰っていけ」
というのが本当の「悔い改め」という字です。ヘブライ語の「シューブ」という字がはっきりそういう字なんです。預言者がみなそれを言っている。
「神に立ち帰れ、立ち帰れ」
と。キリストの中に帰りいくこと。
キリストはどういう関わりを持ちにきたかというと、我々を救わんための関わりである。救いの内容は、その言葉において、行為において、マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネの福音書において各頁に豊かに現われている。それが極まったのが十字架であり、そして、栄光として現われたのが復活のキリストです。キリストはそういう関わりを持つためにやって来られた。受肉の意味は、まさに神の愛が具体的にキリストにおいて、地上において現われる。そして、その愛は十字架において極まる。これが受肉の目的なんです。

## ●あるごとくあれ

ピリピ書2章5節から、

「5**汝らキリスト・イエスの心を心とせよ。**

この「心を心とせよ」というのは、「あるごとくあれ」というギリシア語の言い方なんです。

「キリスト・イエスにあるごとくあれ」

という言い方なんです。

6**即ち彼は神の貌にて居給いしが、神と等しくある事を固く保たんと思わず、**
7**反って己を空しうし僕の貌をとりて人の如くなれり。**

これが受肉です。「僕の貌」というのはどん底の姿です。「人に仕える」というのは「人を助ける」意味です。「仕える」という言葉は、召使ということからくる言葉だけれども。

8**既に人の状にて現れ、**
人間と同じ姿で現われ、
**己を卑うして**
どん底にして、
**死に至るまで、十字架の死に至るまで順い給えり。**

とある。何のために十字架の死に至るまで従ったかと。それは神さまが、
「お前は十字架でこの贖罪をしろ」
と。十字架というのは極悪人の姿です。我々の罪を全部背負ってしまったわけだ。それで私たちは無罪放免というわけだ。私たちは無罪者なんだ、贖われたから。罪はないんです。無罪放免。自由にされた。

だから、この自由は神から賜ったキリストの自由なんです。キリストは天衣無縫の自由の歩き方をされた。それが本当の霊法であった。霊法と自由は一つなんだから、霊的法則というのは。キリストの在り方は霊法が働いている。

私たちも十字架で無罪放免で、そして、自由の境地に入れられたが、自由の力はいずこから来るか。それはもう聖霊なんです。キリストの霊です。その霊の力の質は何か。愛である。クリスマスを迎えようが、復活節を迎えようが、ペンテコステを迎えようが、このキリスト教の三大節は結局、全キリストにみんな関わっている。

## ●義と愛の叫び

少し、ヘブル書を見ていただこうかな。ヘブル書9章11節から、

「11**然れどキリストは来たらんとする善き事の大祭司として来たり、手にて造らぬ此の世に属せぬ更に大なる全き幕屋を経て、**12**山羊と犢(こうし)との血を用いず、己が血をもて只一たび至聖所に入りて、永遠の贖罪(あがない)を終えたまえり。**」（**ヘブル９・11～12**）

キリストは十字架という至聖所に入って、永遠の贖罪を終えたまえりと。ただひとたび、一回だけです。これは相対的な歴史的な事実としては、キリストは「神の子」だとか何とか言ってユダヤ教に反するようなことを言ったものだから、

「十字架にかけてしまえ」

と。キリストは結局、ローマの官憲が政治犯だと思ったり、ユダヤ人が神を瀆(けが)す者だと思ったり、要するに、ローマの官憲にもユダヤ教の祭司にも教法師にも民衆にもみんな捨てられて――私は書いたでしょ、あの『無者キリスト』の十字架というところに――それで、もう天涯孤独だよ。キリストは、

「**わが神、わが神、なんぞ我を棄てたまいし**」

と。「なぜ、お棄てになるか」と叫ばれた。あの叫びは、

「神さま、かくもあなたに百％に生きた私をなぜお棄てになるか。本当は、これでは義が立たないではないですか」

と。そういう天地を貫くところの義の叫びです。それでは義が立たない。旧約から黙示録に至るまで聖書の脊椎骨は義だから神さまとの関係がピシャッと立っているのを義という。

「それが立たないではないですか、私はせっかくそうしたのに」

と。そのあとで、

「**彼らは為すところを知らず。赦してやってください**」

と。これはどん底の愛です。義と愛です。義を立て愛をもって十字架を負った。贖罪を果たしたら、今度は、キリストは墓から霊体をもって甦って、あの岩盤を蹴破って出てきた。

もうあれは霊動です。あの振動は地震ではなく、霊震です。それから至るところに復活のキリストは現われて、もう大変なひとです。

「東西古今、キリストだけの人は一人もいない。ここに救いがある」

と言っているのに、なぜ、この驚くべき事態に驚嘆驚倒しないかと。それは私も、第一流の仏教のお坊さんたちの在り方には無条件に尊敬はしますけれども、キリストの世界はケタがもうひとつ違う。

「それだけの驚くべき生命をお前にやるんだ。私を本当に受けとれば、死んでも死なないんだぞ」

と。それは今度は、生命を人に与えないではいられないわけです。

「何がどうなったっていい。キリストを本当に生きるようになったら、もう何がどうなったって構わないよ」

と。私は今度の年賀状に、

「剣（つるぎ）を取るものは剣で滅びるとキリストが仰った。世界はこの言葉を畏れよ」

「明日、世界が破滅しても、私は今日、リンゴの苗木を植えるよ」

と――これはルターの言葉です――この二つの言葉を書いた。そういう気持で私は１９８４年を迎えるんだと。ただおめでたいんじゃないんだ、ちっとも。こんなことをしていたら、21世紀は無事に来っこないですよ。まぁ大変なもんだ、剣ということをもって象徴されているのは今の核兵器だよな。

まぁ、「福音を信ずる」というのは大変なことなんです。世界史的な意味を持っている。神の歴史の一端にたずさわっている。だから、皆さんはこの福音のためには本当に協力してくださいよ。私はまだまだやりますから。

「よーし、やっていきす」

と、殊に20代の青年は烈々たる気魄を持たなければダメだよ。それは時々、講演会でも開きたくなるよ。学校でも会社でもどこでも、もう遠慮なしに福音をちゃんと告白しなさい。

「わがうちなるキリストを見よ」

と。

## ●一たび贖いたまえり

それで、今のヘブル書の、「一たび贖いたまえり」でしょ。ここに「一たび、一たび」とたくさん出ている。９章25節から、

「25**これ大祭司が年ごとに他の物の血をもて聖所に入るごとく、しばしばおのれを献ぐる為にあらず。26もし然らずば世の創（はじめ）より以来（このかた）しばしば苦難（くるしみ）を受け給うべきなり。然れど今、世の季（すえ）にいたり、**

もう新天新地が来るから、「世の末」と言っている。新約聖書が書かれたときはもう世の末

だからね。

**己を犠牲（いけにえ）となして罪を除かんために一たび現れたまえり。**27**一たび死ぬることと死にてのち審判を受くることとの人に定まりたる如く、**28**キリストも亦おおくの人の罪を負わんが為に一たび献げられ、復（また）罪を負うことなく、己を待ち望む者に再び現れて救を得させ給うべし。」（ヘブル９・25～28）**

再臨して救いを完成なさるという。ここは素晴らしいところです。啓示の事実が「一たび」ということは、これは常に新たに一人びとりに向って言っている言葉なんです。だから、二千年前にキリストは生れたけれども、「今日また生れたもう」ということ。この啓示の「一たび」ということは、啓示的な歴史というものは相対的歴史の一度と違うんです。この「一たび」は永遠性を持っている。そして、実存的なんです。各人が常に新たにこの「一たび」にぶつからなければいけない。

この「一たび」というのは今度は質的にいうと、「決定的に」ということです。決定している。私は十字架を決定的に受けました。あの山上の垂訓の、

**「幸いなるかな、霊の貧しき者、天国はその人のものなり」**

は、

「恵福なるかな、汝、わが十字架によって霊が貧しくされ無者とされた者よ、天国即ち聖霊の我なんじの中にあり」

と響いてきたから。これが私には決定的な事態だった。そうしたら、あとはキリストの言葉が全部読めるようになってしまった。本当だよ、これは。

そういう決定的な体験をしてください。体験せしめられるから。人間だから、また躓いたり転んだりするよ、人間というものは。けれども、ある一つの決定的なことがあると、それからグングン進んでいきます。前進あるのみ。絶対に後退しません。私は集会ごとに前進しているでしょ。だから、

「来なさい。一緒に歩いていきましょう」

と言っているんだ。そうしたら、いろんなことにでっくわしたって、でっくわせばでっくわすほど逆に力が来るような人になりますよ、日常の生活で。何かしらんが、身体の調子が悪かったのが治ってしまったりする。我々の身体は霊肉渾然としているんだから、身体も粗末にしてはいかん。これは神さまから賜ったものだから。福音の証のためだから。

まぁ、80歳くらいになると大体少ししょぼくれてくるんだよね。ところが、私はどうもしょぼくれそうもない。もう歯はみんな総入れ歯だよ。小さいときから虫歯が多くて、歯では苦しんだ。この総入れ歯はありがたい。けれども、何かしらんけれども、

「ああ、くたびれた」

なんて思わないものね、大体。それはキリストにぶつかったらそうなる。

## ●めぐみとまこと

ヨハネ伝1章14節に、

「14**言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり、我らその栄光を見たり、実に父の独子（ひとりご）の栄光にして恩恵（めぐみ）と真理（まこと）とにて満てり。**」（ヨハネ1・14）

とあるでしょ。「恩恵と真理」とある。「まこと」は、言が成るという「誠（まこと）」と書いておこう。「真理」と書くと、これはヘタすると観念的にとられて困るんだ。

「めぐみ」という字は、ヘブライ語では詩篇にたくさん出てくる。詩篇に限りません、イザヤ書にも出てくる。これは「ヘセッド」という字です。「ヘセッド」という字は、「愛、めぐみ、いつくしみ」と、いろんな訳し方をしてある。

「まこと」はもともと「アーメン」という字です。「まこと」という名詞は「エムナー」あるいは「エームーン」という。形容詞だと「アーメン」です。これはどういう意味かというと、もともと、「裏切らない」という字なんです。「頼みがいがある」という字です、この「まこと」という字は。対人関係で、一対一の関係で、人格関係で、相手を裏切らないこと。

「あの人は本当に頼みがいがある人だな」

と思われるような事態がこの「まこと」という字なんです。「あてにならないな」なんていうのは「ロー・エメツ」という。「まこと」という字が今度は名詞になると「エメツ」という。「エメツ」という名詞はギリシア語だと「アレテイヤ」と訳してあるけれども、この「アレテイヤ」も何かひとつの決まった概念にして、人を

「あの人はアレテイヤがどうだこうだ」

なんて言ったら、とんでもないことになる。パリサイになる。そういう現象が今あるところで起きている。そいつが「どうも間違った」と、この頃思っているらしいけれども。そんなことをしたら、そんな全体主義にしたらとんでもない。

この「エメツ」「アーメン」「まこと」という字はどこまでも実存的な意味です。

「私たちは神さまに、まことに申し訳ないもので、まことでないけれども、キリストはまことだよ」

とパウロが言ったでしょ。あの

**「キリストはまことだ」**

というのは、こっちはどんなにキリストを裏切ろうが、申し訳ないことをやろうが言おうが、キリストの方では、「なにをやっているかね」と、いつまでも顧みて、救おうとしていらっしゃる。相手がどうであろうと、それをどこまでも、

**「裏切る者のために、迫害する者のために祈れ」**

とパウロも言っているとおり。そうしたらもう、妬み争いはなくなる。女は妬みが強くて、男は争いが強い。どっちもなくなる。だから実は、「めぐみとまこと」というのは一つのことです。この「まこと」は、神さまはどこまでも、キリストはどこまでも、その誠をもっ

て私たちを貫いてくださる、その質は何かというと、憐れみです。愛です。だから、「まこと」の質はやはり愛なんです。審くのではない。

**「汝が審く審判で審かれるぞ」**

とキリストが言っておられる。キリストは、パリサイが大嫌いなんだ、己を義とするやつは。日本の政治家にはどうも無理だね。やっぱり、もうひとつ突き抜けた人が一人でもいればいいけれども。ただ党派と人数ばっかり考えて、どうのこうのとやっている。捨て身の政治家がいないものな。まぁ、何をするにも結局は、最後はこの宗教の世界を本当に持たなかったら、成就しないんです。この世の損得なんか大したことない。私は自分で言ったらおかしいけれども、本当にある歴史的な使命を感じてきたからね。ええ、やりますから。

## ●空っぽの私の中へキリストが

「信ずる」という字がこの「アーメン」という字なんだ。だから、この「まこと」という字は「信実」と書いたっていい。

**「アブラハム、エホバを信ず」**

というのは、

「エホバをアーメンとしました」

ということ。

「エホバをアーメンとしました」

と。「義」は「セデック」という字です。「ヘセッド」（愛）に対して「セデック」（義）という字がある。神さまとの関係は「セデック」「義」です。人に対して横にずっと愛を流していくのが、これが「ヘセッド」「愛」です。義と愛。これは十字架の形になる。キリストはまさに十字架で象徴されるひとだ。交差する義の線と愛の線です。徳目の義だとか愛だとかを言っているのではないですよ。渾然一如なんです。この義と愛がグーッと一如の世界になる。これが聖霊の世界です。「十字架・聖霊」の事態です。それが本当の大道になる。大道無門。至るところが門であるから無門という。

十字架を賜ると、私たちの馬槽が空っぽになるんですよ。自我から解放されているから空っぽになってしまった。みんな出してしまった。出されたちゃった。そこへキリストが入ってくる。

「十字架の死を受けとるというと、クリスマスのキリストが入ってくる」

という。逆なんだこれ。いいですね。クリスマスにそんな話をするやつがあるかないか知らんよ。それは事実だから仕方がない。私の体験事実だから。では、そこまで。